

## 244 ESWL後の腎機能評価における<sup>99m</sup>Tc-MAG3腎動態シンチグラフィの有用性の検討

本田幹彦、高崎悦司(獨医大 泌) 小泉 満(癌研 放) 杉岡芳明、新井和浩、後藤政文、藤岡睦久(獨医大 放)

ESWL後の腎への影響について、基礎的・臨床的検討が行なわれている。我々も、第76回日本泌尿器科学会に於て基礎的研究を報告した。今回、臨床的検討を無麻酔で行なえるModulith SL-20を使用し、腎結石患者10名を対象として、ESWL前・ESWL直後の腎機能評価を同一条件で、<sup>99m</sup>Tc-MAG3を使用し腎動態シンチグラフィで行なった結果、我々の基礎的研究の裏づけを得た。また、全症例において直後の腎機能は、ESWL照射腎・非照射腎いずれもT(max), T(1/2), T(2/3)の延長が認められた。同時に、血清クレアチニン値の変化も検討した。<sup>99m</sup>Tc-MAG3腎動態シンチグラフィは、ESWL後の腎機能評価に極めて有用な検査法であったので報告する。

## 245 <sup>123</sup>I-OIHによるカプトプリルレノグラムとACE多型性

山井厚子、吉川博子、長崎直美、種ヶ島正照、宮城盛厚、伏見達夫、水入苑生、長谷川昭(東邦大腎臓学) 高野政明、三浦慶和、小堀加智夫(同中放RI) 逸見仁道、井上玲(同分子生物)

Angiotensin converting enzyme (ACE) 遺伝子16イントロンには多型性があり、血漿ACE値はDD, ID, II型の順に高いとされている。そこでカプトプリルレノグラムの反応性がACE多型性により異なるか否かの検討を試みた。健康者を対象としカプトプリル 50mg内服前後に<sup>123</sup>I-OIH 37MBqによる腎動態、血圧、Ht値を調べた。ACE多型性はPCRによるRigatらの方法にて決定した。カプトプリルの投与により全例で平均血圧の低下、ERPの増加、腎血管抵抗の低下が認められたが、ACE遺伝子型により腎血管抵抗の低下の程度が異なることが示唆された。

## 246 Kock回腸膀胱施行者における<sup>123</sup>I-OIHによる上部尿路機能の評価

奥野利幸、有馬公伸、松浦 浩、川村寿一(三重大泌尿器) 日置琢一(島田市民泌尿器)

三重大泌尿器科にてKock-pouchによる尿路変更術を施行した30例に対し、<sup>123</sup>I-OIHを用い術後早期(3ヶ月以内)および安定期(6ヶ月以降)における上部尿路機能の評価を行った。患者に<sup>123</sup>I-OIH静注、約4分後よりpouch内に生食を注入しpouch内圧を測定、同時にレノグラム曲線を得た。生食注入によりレノグラム曲線を、1. 正常型、2. 逆流型、3. 閉塞型、4. 低コンプライアンス型、の4型に分類することができた。この結果、至適導尿量が予測でき、的確な患者指導ができると思われた。

## 247 膀胱尿管逆流症に対する腎臓核医学検査による検討

石井勝巳、西巻 博、吉田暢之、北野雅史、中沢圭治、依田一重、神宮寺公二、松林 隆、(北里大 放) 石田治雄、野本一雄、原 裕子、川村 猛(都立清瀬小児病院)

平成3年4月以来膀胱尿管逆流(VUR)症患者561例について腎に関する核医学検査を施行し検討したので報告する。核医学検査は<sup>99m</sup>Tc-DMSAによる腎シンチグラフィと<sup>131</sup>I-馬尿酸によるレノグラフィと1回採血法による有効腎血漿流量(RBF)測定を行った。検査対象は生後1カ月から17才である。このうち両検査を施行し得たものは292例で他は何れか一方のみを行った。正常腎機能を示したものは561例中73例(13%)で他は何らかの異常を示していた。単腎と考えられたものは12例で、また複数回検査を行って経過観察もした。

## 248 核医学検査とMRIによる精索静脈瘤の検出

守谷悦男、成田浩人、川上憲司(慈大・放) 大石幸彦(同・泌) 浅原 朗(JR東京病院・放) 根津正次、土井 修(聖路加・放)

精索静脈瘤を疑われた80名に核医学検査とMRA(MRangiography)を併用して、内精静脈(ISV)と静脈瘤の描出を試み、併用法の有用性について検討した。核医学検査は<sup>99m</sup>Tc-HSA-Dを用いて、MRAは2D-TOF、SAT、Fast SE、脂肪抑制をおこなった。静態像、TACは理学的所見と相関(r=0.9)を認め、また、MRAではISVが87%に、逆流が30%に認められた。熟練を要せずに精索静脈瘤を検出でき、手術や塞栓術に必要なISVに関する情報を得ることができるので併用法は有用であった。

## 249 精索静脈瘤の診断における陰嚢シンチグラムの有用性に関する検討 -陰嚢部サーモグラフィ、MRIとの比較-

永井 敦、大枝忠史、秋山博伸、市川孝治、小澤秀夫、大森弘之(岡山大学) 戸上 泉(岡山大放)

当科男性不妊症外来を受診した患者のうち、視触診にて精索静脈瘤が疑われた患者(触診(+群))21例、および、視触診では静脈瘤を認めなかった患者(触診(-群))7例に対して陰嚢シンチグラムとサーモグラフィを施行した。シンチグラムの結果は触診(+群)で17例(81%)、触診(-群)で2例(29%)が陽性であり、サーモグラフィではそれぞれ12例(57%)、3例(43%)が陽性であった。シンチグラムとサーモグラフィの一致率は71%であり、検出率においてはシンチグラムがやや優れていた。さらに、同時にMRIを施行できた症例についてはMRI所見との比較検討を行った。